

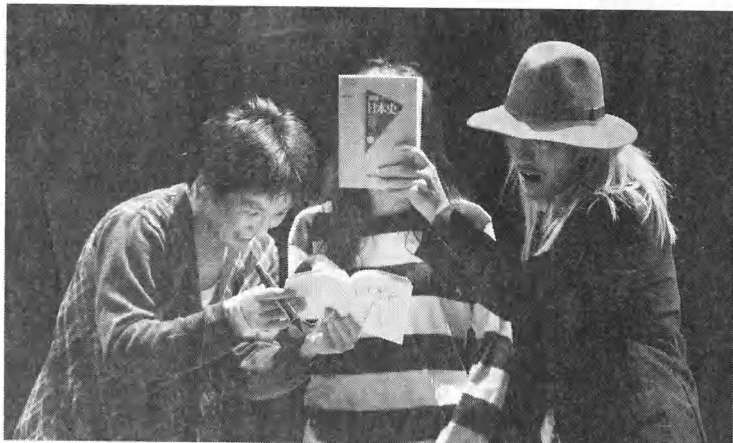
2011年11月4日(金曜日)

(9)

「レッドと黒の膨張する半球体」

(岡崎芸術座)

演劇



富貴塚悠太撮影

実験的で野心的な舞台

まるで演劇らしくない、抽象絵画のような不思議なタイトルの作品だ。英語の「レッド」と

不快が別の意味を与えられていることに私たちは徐々に気がついてゆく。

日本語の「黒」が並べられているのも奇妙だ。二人の男がへらへら笑い、行儀の悪い幼児のように鼻をほじり指をなめながら登場すると、その違和感是不快感に変わるだろう。そして、彼らが、草や表情はそのままに「移民にとっての同化問題」を語り出すと、その

それは、移民や外国人を排斥するために持ち出される不快感と通底しているのだ。他人が自分「たち」と違ったように振る舞っていることが許せない人たちの持つ嫌悪を観客に追体験させる、意表を突いた効果的な挑発だった。

大(作・演出)は、一貫性を持った物語を紡いでゆくのではなく、排外的な態度に閃く断片的な場面をつなげてゆく。移民への蔑称、自分に都合の良い歴史の改変、民族を超えた結婚の破局、二世のアイデンティティなど、重いテーマは一貫して軽薄なまでにデフォルメされている。

だから台本は表面だけを見れば単なる揶揄に見えるかもしれない。挑発も続くと単調になり、もう少し密度も欲しい。だが、彼らの激しい動きの表現力が作品に生命を吹き込んでいる。ヒステリックな子どものような所作はダンスの持つ安定感を拒絶して、バランスを失う寸前まで跳ねまわる。そこでは異文化のステップと日本的な身体が、情熱(赤)と憂鬱(黒)が衝突し、融け合わないままに混在しているのだ。若い演劇人の特権でもある実験的で野心的な舞台だった。

者) (北野雅弘・演劇学研究

岡崎芸術座を立ち上げたペルー生まれの神里雄

6日まで、東京・しすがも創造舎(「フェスティバル/トキーヨ」